

第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

『かなしい音』

埼玉県

白百合学園高等学校

二年 須賀 愛佳里

かなしい音

白百合学園高等学校 二年
須賀 愛佳里 (すが あかり)

雑踏を眺めるのが好きだ。道行く人々の日常を想像するのが楽しくて、駅や交差点ではつい立ち止まってしまふ。友人と闊歩する大学生。肩を寄せ合い歩く恋人たち。交差点で大きく手を振り合う少女たち。駅前で、待ち合わせの相手の到来を待っている人々。皆がそれぞれにストーリーを持って、その日その時の雑踏の中に身を置いている。なんだか宇宙に似ているな、と思う。見上げると悩み事の数々が些細なものに見えてくる宙のように、雑踏も眺めているとふと自分の日常の小ささに気づかされることもある。あの人は、これからどこへ行くのかしら。あの人は、どうして走っているのだろう。行き交う人々の物語に想像をふくらませると、たちまち雑踏の奥に無数の日常が広がり始める。そうして人の数だけ在る日常の数々に思いを馳せるたび、ぼつんと立ち尽くす自分の世界の小ささを実感させられるのだ。

まだ見ぬ日常が無数にあることは、ときに救いとなる。雑踏の中にはまだ出会えていない人や物事が、たくさん散りばめられている。新たな出会いや可能性で溢れている雑踏は、まさに人の宇宙だ。あんなことがしたい。こんな日々を送りたい。私にはまだまだ出来る。私には、こんなに広い世界が待っている。そんな風に思わせてくれる未知の世界が、雑踏の奥には広がっている。

同時に、その広大さほときにえも言われぬ孤独感を誘う。どこまでも広がる宇宙の大きさに恐れを抱くことがあるように、雑踏もふと空恐ろしく感じられることがあるのだ。学校や職場、年齢や環境。何もかもが違う人々の中で、誰とも繋がりを持たず一人で立ち尽くす私。容赦なく前を横切ってゆく人々。いくら辺りを見回してみても、一人一人が持つ物語——人生の中に、私の影は見当たらない。そうして喧騒の中、私は誰の日常の一端にもなり得ない自分自身を自覚することになるのだ。あの人の行き先にもあの人の走る理由にも、私は何ら関係を持っていない。私の日常にあの人はいないし、あの人の日常に私はいない。近いように見えて遠い人々の日常の欠片を眺めていると、時折たまらなく虚脱感に苛まれる。突如宇宙に放り出され、ふらふらと漂う根無し草になったかのような感覚だ。

そんなとき、私に寄り添ってくれる言葉がある。行き場のない孤独からくる感情を温かく包み込み、心に仄かな明かりを灯してくれる言葉。夏目漱石の「吾輩は猫である」の中の有名な一節「のんきと見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする。」である。

この言葉を知った当初は、どんなに明るい人でも皆それぞれに苦悩を持っているものだという意味だと思っていた。しかし、ある時ふと思いついて「かなしい」という言葉を広辞苑で引いてみると、思いのほか豊かな語義が次々と姿を現した。「泣きたくなるほどつらい。」「心がいたんでたえられない。」「といった意味はもちろん、「身にしみていたい。」「強く心をひかれる。」「見事だ。」「あっぱれだ。」「残念だ。」「しゃくだ。」「貧苦である。」「どうしようもなくおそろしい。」「など、様々な意味が並んでいたのだ。その一つ一つを追いつつ、「あの一節の奥深さがどんどん増してゆくような気がした。辞書に載っていた「かなしい」の語義は、どれも人間誰しもが心の底に抱いているもののように思えた。泣きたくなるほど辛い夜。耐えられない心の痛み。誰かを、何かを、愛しくてたまらないと想う瞬間。強く心

惹かれる何か。見事に人を魅きつける魅力。はたまた、人として卑しく未熟な部分。そして、自分自身ですら覗くことのできない恐ろしい深淵。心の最奥に潜む闇——。外見、表層からは汲み取り難いそんな一つ一つの連関が、確かに一人一人のうちに在る。どんな人の心の底にもどこかかなしい音が響いており、「悲しみ」や「哀しみ」、「愛しみ」もが秘められている。この言葉はそうした人間の内面に広がる彩りの豊かさや奥深さ、美しさを存分に知らしめ、味わわせてくれた。一人一人の中になりを潜めている色彩はかくも豊かなのだと、その広がり「かなしい音」に内包されているのだと、私に教えてくれた。そしてその音が絶え間なくあの雑踏にも響いているのだと思つと、途端にこの世界は温かなものに思えてくるのだ。

原文では「悲しい」と書かれているのだから、「哀しい」や「愛しい」として解釈するのはお門違いなのかもしれない。しかし、私には人々の中から哀しく、愛しい響きが聞こえるような気がしてならないのだ。一人一人の奥深くに響く音は単に悲しいだけではないのだと、かくも美しくも複雑で、そして素晴らしいのだと、信じたい。そんな切なる希望を持って、私の推しが綴つたこの言葉を、私は推したい。

そつとペンを置く。窓の外で丸まっている猫の姿が目に入る。みやお、と呑気に鳴くその猫に、つい問うてみたくなる。「君には、かなしい音が聞こえるかい。」と。